

「ミラノ勅令」をめぐって：クリステンセンの復原を中心に

著者	後藤 篤子
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	39
ページ	1-22
発行年	1987-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10302

「ミラノ勅令」をめぐる論争

——クリステンセンの復原を中心に——

後藤 篤子

コンスタンティヌスの「改宗」はキリスト教的ヨーロッパ世界及びビザンツ世界の基点を考える際に重要な画期を成すものであり、その時期と性格については長く激しい論議が交されながら、なお諸説紛々たる状況である。⁽¹⁾ その一因は、キリスト教側史料が伝える対マクセンティウス戦⁽²⁾（三一二年十月二八日）時の幻による改宗伝説が受容しうるものか否かの指標となるべき、関連史料の複雑性・多義性にある。即ち、一方には三一二年前後のコンスタンティヌスはなお新プラトン主義的な太陽神の信仰者であったとする評価が可能ならしめる貨幣等の史料群があり、他方には彼のキリスト教への「改宗」を示すと解されうる史料群が存在するのである。⁽³⁾ かかる史料状況の中にあつて、三一二—三年におけるコンスタンティヌスのキリスト教に対する態度を知る上で、所謂「ミラノ勅令」が占める位置は大きい。

一、「ミラノ勅令」をめぐる論争

さて、所謂「ミラノ勅令」をめぐる長い論争がある。一般には「コンスタンティヌスは三一三年ミラノ勅令によってキリスト教を公認した」とされるが、厳密に言えば、かかる内容を持ったミラノで発令された勅令なるものは史料中には伝わっていない。が、エウセビオスの『教会史』は、「コンスタンティヌスとリキニウスの勅法のラテン語からの翻訳」として、キリスト教徒と非キリスト教徒の双方に完全な信教の自由を与えること、迫害中に没収されていた教会財産は速

「ミラノ勅令」をめぐる（後藤）

かに返還さるべきことの二点を骨子とする文書を収録しており、この文書は冒頭部分で両帝のミラノ会談に言及していることから、一六世紀のカトリック教会史家パロニウスは、これは「ミラノ勅令」(edictum Mediolani)からのギリシア語訳であると考えた。⁽⁴⁾その後一六七九年に発見されたラクタンティウスの『迫害者の末路』の写本には、リキニウスが三年六月一三日ニコメディアで公示したビテュニア州総督宛書簡として、エウセビオスが伝える法とはほぼ同内容の文書が収録されていた。⁽⁶⁾以来はほぼ二世紀間にわたって、ラクタンティウスが伝えるこの文書が「ミラノ勅令」の原文であると考えられてきた。

この伝統的見解に異議をはさんだのはゼークであり、彼は「なるほどこの名(＝ミラノ勅令)で呼び慣わされている一つの文書が史料中に伝えられてはいるが、これは第一に勅令(edictum)ではなく、第二にミラノで発布されたものでもない、第三にコンスタンティヌスによって発せられたものもなく、第四にこれは法による寛容——キリスト教徒はそれ既に(＝三一年のガレリウス寛容勅令によって)得ていた——を全帝国に与えるものでもなく、その内容は極めて限られた重要性しか持たぬ」として、ミラノ勅令の歴史的事実性を真向うから否定した。⁽⁷⁾以来ミラノ勅令の実在をめぐって学界は肯定説・否定説に二分されてきたが、コンスタンティヌスの「改宗」問題との関連で同じ否定説でも、同帝の三十二年「改宗」説を否定して彼の「改宗」の政治的動機を主張する立場から、所謂「ミラノ勅令」を専らリキニウス一人に帰するグレゴワール説⁽⁸⁾、これに対し三十二年「改宗」説に立って、厳密な意味でのミラノ勅令は実在しないが、ミラノ会談時(ほぼ三一年一月末—二月頃と推定される)に所謂「ミラノ勅令」が伝えるような宗教問題に関する合意があったことは事実であり、その前提となっていたのはコンスタンティヌスの宗教的立場であったとする見解に岐れ、⁽⁹⁾一九六〇年代には後者が学界における主流となるに至っていた。⁽¹⁰⁾

かかる状況に対しアナストスはミラノ勅令実在論の立場から論駁を加えた。⁽¹¹⁾否定説の様々な論拠に対する彼の反論をゼークが列挙した四点に準拠して整理すると、(一)「勅令」(edictum)という呼称にこだわるのは edictum や rescriptum (勅答書・mandata (指令書)等の法源が区別されていた帝政前期の慣行に拘泥するもので、帝政後期における重要な区別は寧ろ全帝国に適用される法(leges generales)と個別限定的な法の間のそれであり、加えて三世紀以降「皇帝が定め

たことは法の効力を持つ」(Die. I.4.1.)という原則が確立していた以上、全帝国に適用さるべき皇帝の決定が言及されているなら——この点を所謂「ミラノ勅令」は満たしている——、形式はどうであれ *edictum* の実効を持つ。(一)ミラノ会談における二皇帝の合意事項がその場で文書の形で記録に留められなかったとは考えられず、その文書を元に会談の決定事項を両帝が自領で別個に公示。現存するのは確かにリキニウスが公示した文面のみだが、これはあくまでミラノ会談時の記録に基づくものであり、コンスタンティヌスもこれとほぼ同一の文面を自領で公示したはず。(二)エウセビオスは「コンスタンティヌスとリキニウスの法」として所謂「ミラノ勅令」を収録しており、また「勅令」本文の冒頭「我、皇帝コンスタンティヌスと我、皇帝リキニウスとは」は、通常の法文の冒頭より遙かに両帝の積極的関与を示す表現。(四)「勅令」がコンスタンティヌス領で公布されたことは確かに史料からは検出されないが、この「勅令」は全臣下を対象としており、法制的にこれがコンスタンティヌス領で発効するためには同帝自身による公布が必要であった以上、三十二年十月以降個別的に親キリスト教政策をとっていた同帝が、その政策の明確な法制化たる「勅令」を公布しなかったとは考えられない。同帝が既にドナティズム紛争に関連してアフリカ総督宛に没収教会財産の返還を命じていたこと、或いは西方におけるキリスト教寛容の法的根拠としてはガレリウス勅令がなお有効であったことを論拠に、コンスタンティヌスは自領で「勅令」を公布する必要がなかったと言われるが、これらはなおコンスタンティヌスの意を完全に満たすものではなく、同帝としては「勅令」公布の必要を痛感していたはず。こうして「ミラノ勅令」という伝統的呼称の正当性は証明され得たとするアナストスは、「勅令」中の神概念の曖昧さについては当時なお多数派であった異教徒に対する政治的配慮であるとし、他の関連史料中に認められる同様に曖昧な神への言及は、コンスタンティヌスが「勅令」の起草者たることを承知の上での「勅令」からの借用表現だとする。(16)

このアナストス論文はミラノ勅令否定説の個々の論拠の論駁に努める余り主張に若干の矛盾もあり、またその反論はコンスタンティヌスの三十二年「改宗」を前提として実証不能な推測に依る部分も多く、否定説を採る研究者を納得させうるものではなかった。(18)更に彼は、「ミラノ勅令」をめぐる論争の中で新しい展望を開く手掛りを与えたネッセルハウフの論文を、引用してはいるが十分に消化・検討していない。(19)

ネッセルハウフはラクタンティウスの伝える「勅令」のテキストとエウセビオスのそれを綿密に比較・分析し、従来の論争の中で十分に掘り下げられることのなかった両者における差異、即ち後者の序文が前者に無いこと、前者の「我等が自由な心からその礼拝に従っているところの最高神格」という箇所が後者では単に「神格」となっていることを特に重視して、次の諸点を指摘する。(一)所謂「ミラノ勅令」には起草時期を異にする二つの部分、即ちH Eのみにある序文+MP、48、3+MP、48、4とMP、48、2+MP、48、5が認められる。(二)その二つの部分のうち後者はミラノ会談後、対マクシムス・ダイア戦が勃発してから六月一日ニコメディアにおける公示までの間にリキニウスが起草したもの。(三)前者は対マクセンティウス戦後、元老院により最上位のアウグストゥスとされたコンスタンティヌスが独自に起草したもので、エウセビオスが述べる「キリスト教徒のための最も完全な法」と同定される。(四)ミラノ会談では宗教が議題の一つであったが、この折に何らかの立法行為があったことは史料からは検出されない。会談ではコンスタンティヌスは(三)の自己の法の受容をリキニウスに求め、当時政治的基盤がなお不安定だったリキニウスはこれを受容。しかし、対マクシムス・ダイア戦における勝利で立場が強化されたリキニウスは、マクシムス旧領でその法を公示する際、要点は文字通り引用するが、同時に削除・追加の手も加えて形式上は自己の法として先ずニコメディアで公示(「ラクタンティウスが伝える「勅令」」。(五)MPで言及される「最高神格」は当時これを読む者にはキリスト教の神と同定されたはずで、この部分はコンスタンティヌスのキリスト教への信仰告白。リキニウスはニコメディアでの公示の段階ではその信仰告白の部分をそのまま受容していたが、マクシムス・ダイアの死後パレスティナで公示された法文(「エウセビオスが伝える「勅令」」では、東方の単独帝となった立場の強化を反映して、その信仰告白を削除した。

かかるネッセルハウフの研究は「ミラノ勅令」研究における両テキストの綿密な比較検討の必要性を示し、また両テキスト成立の過程を当時の歴史的状況の中に位置づけた点で重要であった。そのネッセルハウフの研究を批判的に継承し、「ミラノ勅令」の両テキストの網羅的な比較検討から、「ミラノ勅令」の名で呼ぶに値する法文の復原を試みたのが、T・クリステンセンである。彼の試みは「ミラノ勅令」をめぐる研究の今後の展開に与える影響も大きく、また関連する諸問題にも重要な光明を与えるものと思われるので、以下で詳しく紹介することにした。しかし、その前にラクタンテ

イウスとエウセビオスが伝える「ミラノ勅令」の両テキストをとにかくも邦訳しておく必要があらう。

二、所謂「ミラノ勅令」試訳⁽²⁸⁾

(Ⅰ)かつて我等は、宗教の自由は否定さるべきではなく、各自の選択に従って神格に関する事柄に思慮と意志により配慮する権能が各人に対して与えらるべきと考え、キリスト者⁽²⁹⁾に自らの戒律と宗教への信仰を守るよう命じた。然るに、この者たちにかかる権能を与えたその勅書に、明らかに多くの様々な条件が付加されたように思われたので、或いはその後間もなく、この者たちの一部はそのような礼典から遠ざけられたかもしれない。(HE, X, 5, 2-3.)

(Ⅱ)我、皇帝コンスタンティヌスと、我、皇帝リキニウスとは、幸いにもミラノに会して公共の利益と安寧に関わる全ての事柄を協議したる時、大多数の人々にとり、「多くの全体にとり」⁽³¹⁾有益であると我等が考えた他の事柄の中にあっても先ず第一に、神格に対する畏敬を堅持するような事柄が規定さるべきであると考えた。即ち、キリスト者に対しても万人に対しても、各人が欲した宗教に従う自由な権能を与えることである。そのことにより、天におわします神格が何れであれ、「何であれ神性と神事に属される存在が」、⁽³²⁾我等および我等の権威の下に配された万人に対し慈悲深く恩恵的であり得んがためである。(MP, 48, 2. HE, X, 5, 4.) (Ⅲ)それゆえ我等は健全にして最も正しき考慮により、以下の方針が採らるべきであると考えた。即ち、キリスト者の礼典にもせよ、自らが自分に最も適していると思う宗教にもせよ、それに自らの心を捧げる権能は何人に対しても決して否定さるべきではないと考えた。それは、我等が自由な心からその礼拝に従っているところの最高神格が、我等に対して万事において、その常なる恩恵と好意とを与え得んがためである。「それゆえ我等は、健全にして最も正しき考慮により、以下の如くに我等の意志を定めた。即ち、キリスト者の礼典や宗教に従う権能、それを選ぶ権能は、何人に対しても否定されてはならず、かつまた各人に対して、その者が自らに適していると考える宗教に自らの心を捧げる権能が与えらるべきである、と。それは、神格が我等に対して万事において常なる配慮と善意を与え得んがためである」⁽³³⁾(MP, 48, 3. HE, X, 5, 5.) (Ⅳ)従って以下の事が我等の意に適うものたることを貴官は承知されたい。即ち、かつて貴官の役所に送達された、キリスト者の名に関する書簡に見てとら

れた諸条件は、完全に撤廃せられ、「キリスト者に関して貴官に送達された我等の以前の書簡に含まれていた諸条件は何れも完全に撤廃せられ、かつ全く不幸にして我等の慈悲にそぐわぬと思われた事柄も全て撤廃せられて、⁽³³⁾今や同じ意志、即ちキリスト者の宗教を遵守するという意志を持つ人々の各人が、自由にかつ絶対的に、如何なる不安も面倒事〔面倒事〕もなく、その事を守るべく努める〔守る〕⁽³⁵⁾ということである。」(MP、48、4。HE、X、5、6。)(V)我等はこれらの事が貴官に対し完全に知らさるべきであると考えた。それにより、我等がこれらキリスト者に対し、自己の宗教を行なう自由にして絶対的な権能を与えたことを、貴官が承知せんがためである。(MP、48、5。HE、X、5、7。)(VI)この事が我等によりこの者たちに授与されたことを貴官が認識するならば、貴官は、他の者たちにも自己の宗教なり礼典に関する同様に明白かつ自由な権利が、我等の時代の静穏のために許し与えられたことを理解するであらう。それは、各人が自ら選んだものを励行することに自由な権能を持たんがためである。……何れの敬神からも何れの宗教からも何かが我等により……「さて、この事が我等により為されたが、それは何れの敬神についても何れの宗教についても、我等により何かが減じられると思われぬためである。」(MP、48、6。HE、X、5、8。)

(VII)更に我等は加えて、キリスト者の地位のために以下の事が定めらるべきであると考えた。即ち、もし彼等がそこに集うを慣わしとしていた場所、それらに関して既に貴官の役所に送達された書簡に確固たる「別の」規定が述べられていたそれらの場所を、ある者たちが以前に我等の帝庫からか又は誰であれ他の者から購入したと思われるならば、その者たちはそれらの場所を、金銭の受領もなく且つ如何なる賠償要求もなしに、一切のためらいや曖昧さを捨てて、キリスト者たちに返還すること。(MP、48、7。HE、X、5、9。)(VIII)贈与によって獲得した者たちも、同様にそれらをこれらキリスト者に、一層速かに返還すること。なおまた、購入した者たちであれ贈与によって獲得した者たちであれ、もし彼等が我等の好意から何かを望むのであれば、我等の寛大により彼等にも考慮が与えられるよう、代官〔現地の長官〕⁽³⁸⁾に申し出ること。(MP、48、8。HE、X、5、9末尾-10。)(IX)今後、これら全てが直ちに貴官の介入〔貴官の支援〕⁽³⁹⁾により、如何なる遅滞もなくキリスト者の団体に引き渡されるべし。(MP、48、8末尾。HE、X、5、10末尾。)(X)更にこれらキリスト者は、そこに集うを慣わしとしていたそれらの場所のみならず、彼等の個々人ではなく彼等の団体、即ち

教会、「彼等の、即ちキリスト者の団体」⁽⁴⁰⁾の権利に属する他の場所をも所有していたことが知られているので、これらのものも全て、我等が前に述べた法に従って、如何なる曖昧さも異論も一切なくこれらキリスト者に、即ち彼等の団体と集会に返還されるよう、貴官においては命ぜられたい。むしろ上述の方針は遵守されて、それらの場所を我等が前に述べた如く無賠償で返還した者は、我等の好意から損害賠償を期待しうる如くにすること。(MP, 48, 9。HE, X, 5, 11。)

(XI)これら全てのことにおいて、我等の命令がより速かに実行されるよう、貴官は上述のキリスト者の団体に、貴官の最も有効なる介入、「最も強力なる支援」⁽⁴¹⁾を与えられたい。それは、この事においてもまた、我等の寛大により公共の静穏のためが図られんがためである。(MP, 48, 10。HE, X, 5, 12。)

(XII)かく為される限り、前述の如く、我等がかくも多くの事柄において経験してきた神の我等に対する恩恵は、永遠に幸いにも公共の至福と共に我等の成功の上に留まるであらう。「永遠に確固たるものであり続けるのだから」⁽⁴²⁾。(MP, 48, 11。HE, X, 5, 13。)

(XIII)更にまた、かかる我等の好意の法の定むるところが万人の知るところとなりうるよう、貴官の布告を付して当書簡を各所に公示し、万人に知らしめられたい。この我等の好意の法が世に知られぬままにしていることの無きよう。(MP, 48, 12。HE, X, 5, 14。)

三、「ミラノ勅令」復原の試み

さて、所謂「ミラノ勅令」は試訳を一読して明らかなように、内容の重複や論旨のつながりの非整合性が目立つ。特に前半部についてはそれが顕著である。このことが「勅令」について、「全ての宗教の自由を保証するものではあるが、力点は終始キリスト教徒に置かれて」⁽⁴³⁾「前半部は一見キリスト教徒の信仰に対する制限の撤廃を主題とする如くであるが、注意深く読むと、実は一層印象的に万人の宗教の自由の原則が謳われており、その精神は決してキリスト教偏重ではない」⁽⁴⁴⁾という、正反対の評価を可能ならしめてきた。前述したように、ネットセルハウフはこの点及びMP・HE間の差異に着目して、「ミラノ勅令」の前半部が起草者と起草時期を異にする二部分から成立していることを指摘したが、彼の整理はⅠ～Ⅴの部分に限られており、またMPの段階で既に、コンスタンティヌスの起草部分にリキニウスの修正の手が加わ

っていた可能性は考えなかった。クリステンセンはネットセルハウフから更に歩を進めて、HEのラテン語原文ⅡMPに非ずという前提に立ってMPとHEを比較対照しつつ、⁽⁴⁵⁾ 各々の全文を綿密に分析して両者に共通していた原テクストの復原を試みた訳で、以下、試訳に示した彼の内容整理に沿って彼の説の骨子を追ってみよう。

(Ⅰ) ここで言及されている宗教の自由を与える命令とは明らかに三一年のガレリウス寛容勅令であり、続く⁽⁴⁶⁾ *caritatis* の語はマクシミヌス⁽⁴⁷⁾ スルダイアが親衛隊長サビヌスに命じてガレリウス勅令の内容を管轄諸州に伝えさせた、所謂サビヌスの廻状を意味すると解される。ここから、HEのラテン語原文はマクシミヌスの旧領Ⅱシリヤ、パレスティナ、エジプトの一属州総督宛だったと推定できる。更に、この廻状に様々な「条件」が付されたらしいとあるのは、正式にキリスト教を禁じることなく、ただキリスト教徒にとって現実に宗教の自由の制約を意味する様々な措置を講じた、マクシミヌス⁽⁴⁸⁾ スルダイアの迫害再開(三一年十一月)の状況に合致している。従って、Ⅰの概要は「皇帝たちがガレリウス勅令によりキリスト教徒にも宗教の自由を与えたにも拘らず、マクシミヌス⁽⁴⁹⁾ スルダイア領ではそれが制約を受けたらしい」というもの。加えて、ここでの「宗教の自由」の定義、即ち「各自の選択に従って神格に関する事柄に思慮と意志により配慮する権能」という定義は、「父祖の掟とローマの公けの規律」を拒んで自らが遵守すべき掟を勝手に作ったとしてキリスト教徒を非難するガレリウス勅令に比して、明らかにキリスト教的な宗教の自由の概念であり、皇帝たちはⅠでは明らかにキリスト教的態度を示している。⁽⁴⁷⁾

(Ⅱ) ここではコンスタンティヌスとリキニウスがミラノに会して帝国統治、とりわけ「神格 (*divinitas*; *τὸ θεῖον*)」の礼拝の問題を論じ、帝国の宗教政策を規定する決定を下したと述べ、両帝・帝国・臣民に対する神格の恩恵を確保するためにキリスト教徒と非キリスト教徒の双方に自らの望む宗教に従う自由を与える、という決定の内容を伝える。ここで言及される神格が *di Romani* (ローマの国家宗教の神々) でないことは明白で、これは人間の礼拝の対象である個々の神々を超越する、それゆえに名指しされ得ない最高神格を意味している。そして万人が自らの選んだ神を自由に礼拝できるようにすることで、個々の神々が拝され、それを通じて最高神格が相応の畏敬を受けるという思想に基づいて、万人に宗教の自由を与える理由を説明する。即ち、ここに認められるのは新プラトン主義的単神論の神格概念であり、それは

その神格が天に自らの *sedes* (居所あるいは玉座) を有するとする MP に比し、そのことにすら言及しない HE において一層顕著である。⁽⁴⁸⁾ 次にⅠとⅡの関連をみると、内容的にはⅠが専らキリスト教徒の宗教の自由を問題にしているのに対し、Ⅱは突然視野を広げて万人の宗教の自由を論じる。また、Ⅰ・Ⅱの両方を持つ HE ではⅠとⅡの間に何ら文法的つながりがないが、これは個々の主題を持つ各部分が接続詞や関係詞節等で互いに密接に関連し合っているという法律文の特徴に鑑み異例のことである。更に、MP にはⅡしかなく、Ⅱはそれだけで完全に理解可能な独自の序文を構成している。以上から、ⅠとⅡは同時に起草されたものではない。⁽⁴⁹⁾

(Ⅲ) 冒頭の「それゆえ (*itaque* ; *ergo*)」は先行部分との論理的連関を予想させるが、実際に続くのはキリスト教徒と万人とに宗教の自由を与えるというⅡの内容の反復である。その決定の理由として、MP は「我等が自由な心でその礼拝 (*religio*) に従っているところの最高神格が……」と続くが、この最高神格 (*summa divinitas*) は、低次の神々礼拝を通じて拝される最高神という単神論的概念ではなく、ある明確な *religio* において拝される、しかも意識的な選択の対象となりうる最高神格であり、かつこれが帝国の公的な神々の一つでないことは「我等が自由な心から従っている」という強調的表現から窺える。つまり、この最高神格はキリスト教の神であり、この箇所は皇帝たちがキリスト教に帰依したことと表明である。となると、先行するキリスト教徒と万人とに宗教の自由を与えるという決定は、この理由づけと矛盾する。一方、HE は決定内容を①キリスト者の礼典や宗教に従う権能②各人が自らに適していると考える宗教に従う権能の二項に分けて伝える。決定の理由としては、単に「神格 (*eo deo*)」の恩恵を受けるためとする。これらの比較から以下のように考えられる。即ち、MP と HE のラテン語原文には共通の原テクストがあり、そこでは単に「キリスト者の礼典と礼拝 (*observatio christianorum vel religio*)」だけが述べられていたが、MP はこれを *vel observationi christianorum vel ei religioni*……*quam ipse sibi aptissimam esse sentiret* と修正することで、本来これに続く信仰告白におけると同様キリスト教の礼拝を意味していた *religio* を、巧みに非キリスト教諸宗教の意味に拡大。同様に HE も②の部分で挿入することで原テクストの意味を拡大した。更に HE は MP には残っている信仰告白の部分にも手を加え、*summa divinitas* を単に *eo deo* とすることで、非キリスト教徒にも受容可能な神概念にすり換えたのだ、と。こ

して復原された原テキスト(Ⅲ)は、論理的にはⅠとつながり、そうなると思頭の「それゆえ」も生きてくる。⁽⁵⁰⁾

(Ⅳ) ここでいう「キリスト教に関する書簡に見てとられた諸条件」はⅠの「諸条件」と呼応。また、「(キリスト者の宗教を遵守するという)同じ意志」とは、ⅢにありMPに残る「自由な心からキリスト教の礼拝に従う」皇帝たちと同じ意志であり、MPが「各人が……守るべく努める」という語を用いていることから、ここは「皇帝たちと共にキリスト教の神礼拝に熱心に参加せよ」という呼びかけととれる。HEではMPにない一節「我等の慈悲にそぐわぬと思われた事柄……」がある点、つまり皇帝の慈悲という新しい世俗的観点の導入がある点が注目され、原テキストに修正の手が加わっていると思われる。MPにある「努める」や「不安」の語が欠落している点にも、MPが保持する原テキストの親キリスト教的文面のトーンダウンを図る修正の手が窺える。MPがほぼ原文通り保持しているⅣの原テキストは、Ⅲと明白な論旨のつながりを見せている。⁽⁵¹⁾

(Ⅴ) ここではMPとHEは完全に一致しており、その内容はⅣで既に述べられていることの反復であるが、反復の理由は当該決定の重要性を強調するためと思われ、ここでキリスト教徒しか言及されていないことから、ⅤもⅠ―Ⅲ―Ⅳとながる原テキストを構成しており、法文の名宛人たる官吏に守るべき原則を伝える一応の結論部分と思われる。⁽⁵²⁾

(Ⅵ) ここでは宗教の自由を与える理由として「時代の静穏」という純粹に政治的な論拠が、単神論的な宗教的論拠に付加されている。加えて、MPの「授与する」「許し与える」という語は皇帝の *clementia* を想起させる語であり、宗教の自由の授与が皇帝の *clementia* の表明だと述べていることになる。更に、「キリスト教徒が宗教の自由を与えられたのだから非キリスト教徒にも与えられる」という論理はⅡに述べられた決定を前提として初めて意味を成す。従って、ⅥはⅡと共に、キリスト教徒の優遇という印象を避けるために後から原テキストに加筆されたものと思われる。⁽⁵³⁾

(Ⅶ) ここではMPとHEの間の差異は半ばは単なる訳者のミス、半ばはHEの文をMPより平明にしているだけで、内容には相違がなく、迫害中に没収されたキリスト教徒の集会場所を購入した者に、即時無賠償の返還を命じている。⁽⁵⁴⁾

(Ⅷ) 「贈与により獲得した者」に関する規定は、特にMPに顕著なぎこちない文章構造、また「キリスト者に速やかに返還せよ」という、直前に述べられている命令の反復から推して、返還命令の対象範疇に関して誤解・曲解を生じさせぬ

ための後からの挿入と考えられる。続く箇所は先行する部分とは独自の新しい主題「皇帝の *clementia*」に基づく損害賠償の約束を扱う。これはⅦに「金銭の受領も賠償要求もなしに」とあることを考えると奇異であり、この部分は「贈与により獲得した者」に関する規定より後に更に追加されたものと思われる。⁽⁵³⁾

(Ⅸ) 「これら全て」は明らかにキリスト教徒の集会場所への言及で、Ⅸは元来Ⅶとつながっていた。なおMPは現存する形では属州総督宛書簡だが、「貴官の介入」を額面通り取ると、一属州総督以上に積極的な主体性を相手に求めていると思われる点に留意すべきだろう。⁽⁵⁶⁾

(Ⅹ) MPとHEの差異は訳者に帰されるべきもので、ここではHEのラテン語原文はMPの文面とはほぼ同一。Ⅹは内容的にも文体的にも独立した一部分を成すもので、既存の「法」(ⅡⅦ)への注解にも等しいゆえに、後からの挿入。⁽⁵⁷⁾

(Ⅺ) 「これら全て」は没収教会財産の返還で、「前述された」はⅩで言及される「前述の法」に述べられた、の意。冒頭の命令はⅨの反復だが、ここではそれに皇帝の *clementia* による公共の静穏のためという理由づけが与えられている。以上の諸点からⅪはⅩの続きで、没収教会財産の返還命令が皇帝の親キリスト教政策に由来するという印象を避けるための後からの挿入。⁽⁵⁸⁾

(Ⅻ) ここでは没収教会財産の返還を命じるのは、皇帝たちが経験してきた神の恩恵(*divinus favor; ὁ θεῶν οὐκός*)を確保するためと述べられる。「前述された如く」という句はⅢの最後の部分と呼応し、キリスト教の神の恩恵に言及するものである。ところで勅法では一つの規定に続いてその理由づけをするのが普通であり、Ⅶの没収財産返還命令がすぐに理由づけされていないのは奇異だったが、本来ⅫがⅦ・Ⅸに続いてその理由づけを与えていたのであり、それがⅧ・Ⅹの挿入により切り離されてしまったのだと考えれば納得できる。⁽⁵⁹⁾

(Ⅼ) ここではHEのラテン語原文はMPとほぼ同一の文面。「万人に知らしむるよう公表せよ」という趣旨の節句が重複しているのは原テキストへの追加と思われるが、その理由は恐らくは原テキストの受取人が一属州総督ではなかったことに由来するのだろう。⁽⁶⁰⁾

以上をまとめると、MPとHEの比較分析から(Ⅰ—Ⅲ—Ⅳ—Ⅴ)+(Ⅶ—Ⅸ—Ⅻ)+Ⅼという原テキストが復原されう

る。それは次のようになる。

「かつて我等は、宗教の自由は否定さるべきではなく、各自の選択に従って神格に関する事柄に恩恵と意志により配慮する権能が各人に対して与えらるべきと考え、キリスト者に自らの戒律と宗教への信仰を守るよう命じた。然るに、この者たちにかかる権能を与えたその勅書に、明らかに多くの様々な条件が付加されたように思われたので、或いはその後間もなく、この者たちの一部はそのような礼典から遠ざけられたかもしれない。それゆえ我等は健全にして最も正しき考慮により、以下の方針が採らるべきであると考えた。即ち、キリスト者の礼典や宗教に従う権能は何人に対しても決して否定さるべきではないということである。それは、我等が自由な心からその礼拝に従っているところの最高神が、我等に對して万事においてその常なる恩恵と好意とを示し得んがためである。従って、以下のことが我等の意に適うものたることを貴官は承知されたい。即ち、キリスト者の名に関する以前の書簡に見てとられた諸条件は全て完全に撤廃せられ、今や同じ意志、即ちキリスト者の宗教を行なう意志を持つ人々の各人が自由かつ絶對的に、如何なる不安も面倒事もなく、そのことを守るように努めるということである。我等はこれらのことが貴官に對して完全に知さらるべきであると考えた。それにより、我等がこれらキリスト者に自己の宗教を行なう自由にして絶對的な権能を与えたことを、貴官が承知せんがためである。

更に我等は加えて、キリスト者の地位のために以下のことが定めらるべきであると考えた。即ち、もし彼等がかつてそこに集うを慣わしとしていた場所、それらに關して既に以前に確固たる規定が述べられたところのそれらの場所が、以前に我等の帝庫からか他の何人からか購入されたと思われるならば、それらの場所は金銭も如何なる賠償要求もなく、一切のためらいや曖昧さも捨て、キリスト者たちに返還さるべきこと。今後これらの全てが直ちに貴官の介入により、如何なる遲滞もなくキリスト者の団体に對し返還されなければならない。かくなす限り、上に述べられた如く、我等がかくも多くの事柄において経験してきた神の我等に對する恩恵は、永遠に幸いにも公共の至福と共に我等の成功の上に留まるであらう。

更にまた、かかる我等の好意の法の定むる所が万人の知るところとなりうるよう、貴官の布告を付して当該書簡を公表

せよ……」⁽⁶¹⁾

四、「ミラノ勅令」について

こうしてMPとHEの比較分析から所謂「ミラノ勅令」の原テキストを復原したクリステンセンは、その原テキストとMP、HEの成立過程について次のように推論する。

(I—III—IV—V)はマクセンティウス打倒後間もなくコンスタンティヌスがリキニウスとマクシミヌス・ダイアに送達した書簡であり、これに(VII—IX—XII)及びXIIIを加えたものを、政治的立場がまだ弱かったリキニウスがミラノ会談で受容。この合意内容は会談後直ちに復原された原テキストの文面でマクシミヌス・ダイアに送達された。これこそ、全帝国に適用さるべき規定を含む皇帝の命令がミラノから送られたという意味で、「ミラノ勅令」と呼びうるものである。MPは、この内容をリキニウスが修正(III)・敷衍(II・VI、VIII・X・XI)してニコメディアでビテュニア総督宛書簡として公示したものであり、リキニウスはミラノ会談時に非キリスト教徒に対する宗教の自由の保証をコンスタンティヌスから取りつけておいたと思われる。HEはマクシミヌス・ダイアの死後にリキニウスがMPに更に手を加えてパレスティナ総督宛に送達し、カイサレアで公示されたものをエウセビオスが翻訳筆写したのであり、HEに窺える宗教観念の方が一層新プラトン主義的単神論の色彩濃いのは、リキニウスの政治的立場の強化を反映するものである。⁽⁶²⁾

さて、こうして復原された「ミラノ勅令」は所謂「ミラノ勅令」で問題とされる新プラトン主義的単神論の色彩を完全に払拭されて、なお「神の恩恵を確保するために神を拝する」というローマの伝統的宗教感情の枠内にあるにせよ、この時点におけるコンスタンティヌスの極めて明白な親キリスト教的態度を物語るもの、換言すれば三十二年「改宗」説の強力な証左となる。が、それだけにこの復原は様々な角度から慎重に検討する必要がある。筆者自身まだ検討が甚だ不十分な段階ではあるが、差し当たり考えられることを整理しておくのも意味ない事ではないと考える。

先ずクリステンセンの分析そのものについて見るならば、後半(VII—XII)の復原の論拠は、前半(I—VI)のそれ程説得的ではない。少くとも、VIIIの没収教会財産を贈与によって獲得していた者に対する返還命令の部分を後からのリキニウ

スによる追加として、「ミラノ勅令」から削除する必然性は無いように思われる。⁽⁶³⁾ また損害賠償の約束に関しても、Ⅶで無賠償でと言っているのは「キリスト教徒側に損害賠償を要求するな」と命じているのだという解釈も可能であろう。

前半部に関する分析は、細部に疑問は残るが、かなり説得的であるように思われる。とはいえ、Ⅲ↓Ⅲの復原、 *summa divinitas*＝キリスト教の神とする彼及びネッセルハウフの論拠は、「ミラノ勅令」復原のキーポイントであるだけに、当時の宗教思想的背景にも照らして今後十分な検討が必要であらう。

次に、「ミラノ勅令」は三十二年十一月―三十二年夏の状況の中にどう位置づけられるだろうか。

ラクタンティウスは恐らくマクセンティウス打倒後にコンスタンティヌスがマクシミヌス・ダイアに送った書簡に言及している。⁽⁶⁵⁾ またエウセビオスは、マクセンティウス打倒後コンスタンティヌスとリキニウスが意志と目的を一つにしてキリスト教徒のための最も完全な法を最も詳細に定め、神が彼等のために行なった驚異的諸業、マクセンティウスに対する勝利の報せと共にその法をマクシミヌスに送ったと述べる。⁽⁶⁶⁾ これに応じてマクシミヌスはサビヌス宛に迫害中止令を発したが、これに対しエウセビオスは、コンスタンティヌスとリキニウスは集会や教会建立も許可するようマクシミヌスに書き送り、また勅書や法によって自領の全臣下にこれを許しているのに、マクシミヌスは単に迫害を止めただけと難じている。⁽⁶⁸⁾ マクシミヌスはミラノ会談後小アジアからボスポラスを渡ってリキニウス領に侵攻するが、四月三〇日の対戦でリキニウスに敗れ、五月にキリスト教徒の宗教の自由の保証・教会建立の許可・没収されていたキリスト者の家屋や土地は売却や贈与により個人の所有に移っていたにせよ返還せよという命令を骨子とする寛容令⁽⁶⁹⁾を発したのち、その夏に死去する。

かかる状況の中に「ミラノ勅令」を位置づけてみると、かなりの整合性が得られる。即ち、

三十二年十一月―十二月

コンスタンティヌスがマクシミヌス・ダイアに書簡（Ⅰ―Ⅲ―Ⅳ―Ⅴ）を送る。――マクシミヌスの迫害中止令。
コンスタンティヌス、アフリカ総督宛に没収教会財産の返還命令。⁽⁷⁰⁾

三十二年一月末―二月

ミラノ会談→コンスタンティヌスとリキニウス、"ミラノ勅令"をマクシミヌスに送る。

三二三年二月三月

マクシミヌス、リキニウス領に侵攻。

三二三年四月

マクシミヌスの敗戦。

三二三年五月

マクシミヌスの寛容令。

三二三年六月一三日

所謂「ミラノ勅令」ニコメディアで公示。

三二二年十一月十二月の「コンスタンティヌスの書簡」は要するにガレリウス勅令による寛容をキリスト教徒に保証せよという内容で、エウセビオスが「集会や教会建立も許すよう言われた」と述べる状況に合致する。特に注目されるのは、「ミラノ勅令」とマクシミヌス寛容令の内容がほぼ一致している点である。⁽⁷²⁾この点と、エウセビオスがこの寛容令について「キリスト教徒の自由に関する法を最も完全且つ詳細に定めた」と述べている点を考え合わせると、その同定について長く論議されている「キリスト教徒のための最も完全な法」⁽⁷³⁾と「ミラノ勅令」という仮説も許されよう。

このようにクリステンセンによる「ミラノ勅令」の復原は、コンスタンティヌスの「改宗」問題、リキニウスやマクシミヌスの宗教政策、当時の政治史等、様々な問題に全く新しい視点を与え得るものだけに、関連史料と対照させながら十分に吟味したうえで、これを更に個々の問題の中に位置づけていく必要があるが、それはまだ筆者の及ぶところではない。

註

(1) 主要な論点と一九五〇年代までの論争については弓削達「コンスタンティヌス大帝とキリスト教の問題——『ウィタ』と貨幣を中心に——」、『現代歴史学の新動向』（増田四郎編、如水書房）一九五三年、同「コンスタンティヌス大帝と太陽宗教の問題——

「ミラノ勅令」をめぐる（後藤）

F. Altheim, *Aus Spätantike u. Christentum*. 1951. を繞つて——』『史学雑誌』六三—二(一九五四年)一五—一六五頁、同「コンスタンティヌス論争の進展」『一橋論叢』四—一五(一九五九年五月)四—一五七頁及び四二—一二(一九五九年八月)五八—七四頁、新田一郎「コンスタンティヌスの改宗——その時期と動機をめぐる問題——」『西洋史学』五三(一九六一年)三—三三—三九頁を参照。

(2) 「改宗」の定義の問題も諸説が岐れる一因であるが、初期キリスト教にあっては伝道者による病氣治療等を通じてキリスト教の神の「奇跡」を起こす力、恩恵を施す力を信じ、それゆえにその神を信仰対象として選ぶという形で「改宗」者は多かったと思われ、筆者は「改宗」をかかる形も含めて広義に考える。Cf. R. McMullen, *Christianizing the Roman Empire* (A. D. 100–400), New Haven and London, pp. 1ff., 20ff.

(3) ドナティズム紛争に関連するコンスタンティヌスの書簡(Eusebius, HE, X, 5, 15–17; X, 6; X, 7.)。但し、弓削達「コンスタンティヌスの『改宗』とドナティズム紛争」『研究』(神戸大学文学会)八(一九五五年)一—五七頁はこれら三書簡をその歴史的背景(ローマの穀倉として重要な北アフリカでの宗教紛争)から切り離して「キリスト教会への愛顧を示す政策の最初とするのは許しがたい歴史的誤謬とし、新田前掲論文も同様(二三頁)。

(4) Eusebius, *Historia Ecclesiastica* (HE と略記) X, 5, 1–14.

(5) Lactantius, *De mortibus persecutorum* (MP と略記) 48, 1.

(6) *ibid.*, 48, 2–12.

(7) Otto Seeck, “Das sogenannte Edikt von Mailand,” *Zeitschrift für Kirchengeschichte*, 12 (1891), pp. 381–86.
(Torben Christensen, “The so-called Edict of Milan,” *Classica et Mediaevalia*, 35 (1984), p. 130 から引用)

(8) コンスタンティヌスの「改宗」問題をめぐるグレゴワール説とそれへの批判について(註(1)の弓削論文を参照)。

(9) N. H. Baynes, C. A. H., xii, 1939, p. 686; A. Alföldi, *The Conversion of Constantine and Pagan Rome*, Oxford, 1948, p. 37. 等。

(10) 筆者自身は古い文献の渉猟が未だ不十分であり、この問題をめぐる学説史についてはアナストス論文(註(11))やクリステンセン論文(註(7))等を参照した。邦語文献では J・M・ドミンゲス「ミラノ勅令」(三—一三年)について——その歴史性と意義をめぐって——』『ヨーロッパ・キリスト教史』(中央出版社)一九七一年、が簡潔な学説史展望を与えている。なおドミンゲスは

アルフェルディ等の立場を採り、ミラノ勅令は実在せずミラノ協定と言うべきだが、重要なのは呼称ではなくその内容であり、その内容の主導者はコンスタンティヌスだったとする（三二九—三三二頁）。

- (11) Milton V. Anastos, "The Edict of Milan (313): A Defence of its Traditional Authorship and Designation," *Revue des études byzantines*, 25 (1967), pp. 13-41.
- (12) *ibid.*, pp. 30ff.
- (13) *ibid.*, pp. 27ff.
- (14) *ibid.*, pp. 16, 18.
- (15) *ibid.*, pp. 18-21; 32-37.
- (16) *ibid.*, pp. 38-41. この神概念の曖昧さはコンスタンティヌスの「改宗」問題との関連で多くの論議を生んでいる。弓削達「所謂『ミラノ勅令』について」『西洋古典学研究』二（一九五四年）八九—九五頁、はアルトハイムの研究を援用しつつ「勅令」の宗教観念を分析して「これを新プラトン主義的太陽神学に帰す。新田一郎『ミラノ勅令をめぐる諸問題』『ヨーロッパ・キリスト教史』」（中央出版社）一九七一年「も同様の立場で『勅令』をこの時点でコンスタンティヌスがなお決定的に改宗していなかったことの証左とする。他方、三二二年「改宗」説を採る立場はアナストスと同様の解釈をする。Cf. A. Alföldi, *op. cit.*, pp. 69 ff.; J. H. W. G. Liebeschuetz, *Continuity and Change in Roman Religion*, Oxford, 1979, pp. 258 ff.
- (17) 例えばコンスタンティヌスによる「勅令」公布の時期を、二二頁では最も可能性があるのは三二二年末でリキニウスとのミラノ会談に先立つ時期とする一方で、二八頁ではミラノ会談後を想定している。
- (18) T. D. Barnes, *Constantine and Eusebius*, Cambridge, Mass. and London, 1981, p. 318, n. 4; J. L. Creed ed., *Lactantius, De mortibus persecutorum*, Oxford, 1984, p. 122. なお肯定説を採る W. H. C. Frend, *The Rise of Christianity*, London, 1984, もアナストスを引いている。
- (19) H. Nesselhauf, "Das Toleranzgesetz des Licinius," *Historisches Jahrbuch*, 74 (1955), pp. 44-61.
- (20) 本稿二節の試訳を参照。
- (21) H. Nesselhauf, *op. cit.*, pp. 45-48.
- (22) *ibid.*, pp. 48f.

「ミラノ勅令」をめぐる（後藤）

- (23) *ibid.*, pp. 49-53. 「キリスト教徒のための最も完全な法」については、本稿四節一四頁参照。
- (24) H. Nesselhauf, *op. cit.*, pp. 53f.
- (25) *ibid.*, pp. 54-61. なお、ラクタンティウスが伝える所謂「ミラノ勅令」のテキストをMP、エウセビオスのそれをHEと表記するに注意。
- (26) 国内でも既に松本宣郎「キリスト教大迫害(三〇三—三二三)研究——史料と年代決定に関する研究動向から——」『史学雑誌』八五—二(一九七六年)五九頁注(130)が、その重要性を指摘している。
- (27) T. Christensen, "The so-called Edict of Milan," *Classica et Mediaevalia*, 35 (1984), pp. 129-175.
- (28) 以下のローマ数字はクリステンセンによる所謂「ミラノ勅令」の内容分類を示す。紙数の都合上、MPとHEの間に意味的に重要な差異がない場合はMPの邦訳のみを示し、差異がある場合はその箇所に傍点を付して「」内にHEの訳を示すことにする。なおクリステンセンの立論を追うために、なるべく逐語的な直訳を心がけたので、訳文はかなりぎこちない生硬なものになっている点、予めお断わりしておく。テキストはクリステンセンの用いた *De moribus persecutorum*, ed. S. Brandt, CSEL 27 (Wien, 1897); *Eusebius Werke II*, ed. E. Schwartz, Leipzig, 1908. に従う。
- (29) *τοὺς τε Ἀγριτῶνους* の *τε* は相関接続詞なのでシニョアルツを始め一般にこのあとに「キリスト者と(万人と)」と補うが、クリステンセンは「この序文は専らキリスト者の信仰の自由の問題を扱っており、こう補う必然性はない、この *τε* は筆写者が直前で行われている内容から推して、当然キリスト者だけではなく他の人々にも言及されるはずと思い込んで何気なく入れてしまったものと考え、これを削除する(*op. cit.*, p. 134.)」。
- (30) 「勅書」= *αυτοκρατορική*. 「条件」= *αἰδέσεις*.
- (31) MP: pluribus omnibus; HE: ἐν πολλοῖς ἀπασι.
- (32) MP: quicquid divinitas in sede caelesti; HE: ὁ τὴν ποτὲ ἐσσαν θεοτόκους καὶ οὐρανίου τοῦ ἁγίου. プラントはHEの構文から推して quicquid <est> divinitatis と補うが、クリステンセンはHEのラテン語原文=MPに非ずという認識に立って、HEに基づいてMPを校訂するに慎重であつた(*op. cit.*, p. 171, n. 29.)。
- (33) MP: ut nulli omnino facultatem abegandam putarem, qui vel observationi christianorum vel ei religioni mentem suam dederet quam ipse sibi aptissimam esse sentiret, ut possit nobis summa divinitas, cuius religioni

Iberis mentibus obsequimur, in omnibus solitum favorem suum benivolentianque praestare.

HE: ὅπως μὴδὲν παυρέως ἐξουσία ἀποητέα ἢ τοῦ ἀκολουθεῖν καὶ αἰρεῖσθαι τῶν Χριστιανῶν παρανομάξῃ τῇ θρησκείᾳ ἐκάρτω τε ἐξουσία δοθεῖν τοῦ διδοῦναι ἑαυτοῦ τὴν διάνοιαν ἐν ἐκείνῃ τῇ θρησκείᾳ, ἣν αὐτὸς ἑαυτῷ ἀρμόξεν νομῆσαι, ὅπως ἡμῖν δυνήθῃ τὸ θεῖον ἐν πᾶσι τὴν ἔθνην σπουδῆν καὶ κατοκλήθαιαν παρέχειν.

- (35) MP: amotis omnibus omnino condicionibus quae prius scriptis ad officium tuum datis super christianorum nomine videbantur.

HE: ἀπαρθεῖσάντων παυρέως τῶν αἰρέσεων, αἵτινες τοῖς προτέροις ἡμῶν γράμματα τοῖς πρὸς τὴν σὴν καθούσῳτι ἀποσταλείν περὶ τῶν Χριστιανῶν ἐπέχοντο καὶ ἄνωγα πᾶσι σκαῖά καὶ τῆς ἡμετέρας παρότρυνος ἀλλότρια εἶναι ἰδοῦναι, ταῦτα ὑπαίρειθῃ.

- (36) MP: observare contendant; HE: παραφυλάττω.

- (37) MP: ...cuiquam honori neque cuiquam religioni aliquid a nobis.

HE: τοῦτο δὲ ὑπὸ ἡμῶν γέγρονεν, ὅπως μὴδὲμᾶ τιμῇ μὴδὲ θρησκείᾳ τινὶ μεμεῶσθαι τι ὑπὸ ἡμῶν δοκῇ.

- (38) MP: certa...forma; HE: τύπος ἕτερος.

- (39) MP: vicarium; HE: τῷ ἐπὶ τόπῳ ἐπάρχῳ. クリスチエン⁴⁴ M⁴⁵ D⁴⁶ vicarius 代理官 vicarius praefecti praetorio 代理官に比し H⁴⁷ B⁴⁸ 地方官の役人を指しつゝ考へる (Op. cit., p.155.)⁹

- (40) MP: per intercessionem tuam; HE: διὰ τῆς σῆς σπουδῆς.

- (41) MP: corporis eorum id est ecclesiarum; HE: τοῦ αὐτῶν σώματος, τοῦ⁵ ἔσθιν τῶν Χριστιανῶν.

- (42) MP: intercessionem tuam efficacissimam; HE: τὴν σπουδῆν δυνατώτατα.

- (43) MP: per omne tempus prospere successibus nostris cum beatitudine publica perseveret.
HE: διὰ παντὸς τοῦ χρόνου βεβαίως διαμένειν.

- (44) M. Anastos, op. cit., p.38.

- (45) 弓削達「所謂『ミラノ勅令』について」九一頁。

- (46) クリステンセンは「試訳(Ⅱ)にある『大多数の人々』(MP)と『多くの全体』(HE)という差異は後者が全く意味を成さぬ以

「ミラノ勅令」をめぐって(後藤)

上、翻訳者がラテン語原文中にあった *hominibus* を *omnibus* と誤読したためとしか考えられないが、これはその翻訳者が意味をとることより原文の忠実な逐語訳を優先させていたことの証左であり、従って、MP・HE間の差異はMPがHEの原文でないことに由来するという前提を正当化すると指摘 (*op. cit.*, p. 138)。なお、HEの原文ⅡMPに非ずと想定すること自体は目新しいことではないが (*cf.* M. Anastos, *op. cit.*, p. 17, n. 5) その想定に立って両テキストの由来を納得するに足る論拠で説明したのはネッセルハウフが最初であった。

- (46) HE, IX, 1, 3-6.
- (47) T. Christensen, *op. cit.*, pp. 134-136.
- (48) *ibid.*, pp. 137f., 139.
- (49) *ibid.*, pp. 139f. *cf.* H. Nesselhauf, *op. cit.*, pp. 47f.
- (50) T. Christensen, *op. cit.*, pp. 140-144. なお一四三頁の下から四行目のC5・5はC5・4の、同三行目にあるC5・3はC5・5の誤まりであらう。summa divinitas Ⅱキリスト教の神⁴及び itaque については既にネッセルハウフが指摘しているところであるが、彼は非キリスト者への信仰の自由の保証は、歴然たる信仰告白が非キリスト教徒に危惧を与えぬよう配慮したコンスタンティヌスの手になるものと考えている点で、クリステンセンと異なる (*op. cit.*, p. 60)。
- (51) T. Christensen, *op. cit.*, pp. 145-148.
- (52) *ibid.*, pp. 148f., 151. ネッセルハウフは内容の反復・対応とⅢの神概念の分析から、Ⅲ・Ⅳをコンスタンティヌスに、Ⅱ・Ⅴをリキニウスに帰したが (本稿一節四頁参照) これに対し、H. Casritius, *Studien zu Maximinus Data*, Kallmünz, 1969, p. 81, n. 103. は、Ⅳは単にキリスト者個人の宗教の自由を述べ、Ⅴはキリスト者の総体に自由を与えているとして、Ⅳをリキニウスに、Ⅴをコンスタンティヌスに帰する。
- (53) T. Christensen, *op. cit.*, pp. 149-151.
- (54) *ibid.*, pp. 152f.
- (55) *ibid.*, pp. 154f.
- (56) *ibid.*, p. 156.
- (57) *ibid.*, pp. 157f.

(65) *ibid.*, p. 159.

(66) *ibid.*, pp. 160f.

(67) *ibid.*, pp. 162f.

(68) HE, X, 5, 2-3+ Itaque hoc consilium salubri ac rectissima ratione ineundum esse credidimus, ut nulli omnino facultatem abnegandam [sequendi] observation[em] christianorum vel religion[em], ut possit nobis summa divinitas, cuius religioni liberis mentibus obsequimur, in omnibus solitum favorem suum benivolentiamque praestare, quare scire convenit placuisse nobis, ut amotis omnibus omnino conditionibus quae prius scriptis super christianorum nomine videbantur, nunc libere ac simpliciter unus quisque eorum, qui eandem observandae religionis christianorum gerunt voluntatem, citra ullam inquietudinem ac molestiam sui id ipsum observare contendant, quae sollicitudini tuae plenissime significanda esse credidimus, quo scires nos liberam atque absolutam colendae religionis suae facultatem isdem christianis dedisse. atque hoc insuper in persona christianorum statuendum esse censuimus, quod, si eadem loca, ad quae antea convenire consueverant, de quibus etiam certa antehac forma fuerat comprehensa, priore tempore vel a fisco nostro vel ab alio quocumque videntur esse mercati, eadem christianis sine pecunia et sine ulla pretii petitione, postposita omni frustratione atque ambiguitate, restituant[ur]. quae omnia corpori christianorum protinus per intercessionem tuam ac sine mora tradi oportebit. hactenus fiet, ut, sicut superius comprehensum est, divinus iuxta nos favor, quem in tantis sumus rebus experti, per omne tempus prospere successibus nostris cum beatitudine publica perseveret. ut autem huius sanctionis benivolentiae nostrae forma ad omnium possit pervenire notitiam, praelata programme tuo haec scripta..... (T. Christensen, *op. cit.*, p. 164.)

(69) *ibid.*, pp. 164-169.

(70) クリステンセン自身、この部分と続く損害賠償の約束は共に後からの挿入としながらも、挿入時期にはずれがあったと考えていることは前に見た通りである(本稿三節一〇—一一頁)。

(71) 例えばⅣで述べられている、撤廃さるべき諸条件を含む書簡の同定の問題。クリステンセンはⅠとの対照で、この「諸条件」をガレリウス勅令の内容を伝える「サビヌスの廻状」にマクシミヌスⅡダイアが付加した制約とする訳だが、だとするとその「諸条

「ミラノ勅令」をめぐる(後藤)

件」を含む書簡に何故リキニウスが「我等の」(HE: *ἡμῶν*) という語を付ねねばならないのか分らない。この句に関する議論について cf. M. Anastos, *op. cit.*, pp. 30f.; n. 40.

(65) MP, 37, 1. "Litterae Constantini".

(66) HE, IX, 9, 12: ἐπὶ τοῖς αὐτοῖς τε Κωνσταντίνος καὶ οὐ αὐτῷ βασιλεὺς Ἀκύνος, ἀμφοὶ μὲν βουλῇ καὶ γνώμῃ νόμῳ ὑπὲρ Χριστιανῶν τελώσασιν πᾶσι τὰς διατάξεις, καὶ τῶν περπατημένων εἰς αὐτοὺς ἐκ θεοῦ τὰ παρὰ ὁρὰ τὰ τε τῆς κατὰ τοῦ τυράννου νέκρης καὶ τοῦ νόμου αὐτῶν Μαρίμῳ, διατέμνεται.

(67) *ibid.*, IX, 9a, 1-9. この書簡が三二二年末のものと見られることは H. Nesselhauf, *op. cit.*, p. 52, n. 12; H. Castritius, *op. cit.*, pp. 63ff.

(68) *ibid.*, IX, 9a, 10-12.

(69) *ibid.*, IX, 10, 7-12. その時期については cf. H. Castritius, *loc. cit.*

(70) HE, X, 5, 15-17. クリステンセンは(VII—XII)の由来については何も述べていないが、当然この書簡が想起されるべきであろう。この点については、弓削達「所謂『ミラノ勅令』について」九〇頁も見よ。

(71) マクシミヌス寛容令には、「贈与により……」も言及されており、この点からもクリステンセンのVIIIについての推論は再考を要すると思われる。

(72) HE, IX, 10, 6: νόμου τε τοῦ ὑπὲρ ἐλευθερίας αὐτῶν τελώσασιν καὶ πᾶσι τὰς διατάξεις.

(73) この仮説の最大の難点はエウセビオスの記述から「最も完全な法」の年代が三二二年末と推定されることだが、三二二年説にもエウセビオスがリキニウスの共同関与を明言しているという難点があり、「最も完全にして詳細」という形容の仕方から見てもこの仮説は捨て難く、機会を改めて更に考えてみたい。なお、この問題をめぐる論争の概観については cf. M. Anastos, *op. cit.*, pp. 23ff.; H. Nesselhauf, *op. cit.*, pp. 51f.; H. Castritius, *op. cit.*, pp. 77-83; R. Klein, "Der νόμος τελώσας Konstantins für die Christen im Jahre 312," *Römische Quartalschrift*, 67 (1972), pp. 1-28.